

# 大志白遺跡群発掘調査概報 Ⅱ

—アンビックス緑が丘ニュータウン開発事業に伴う平成9年度発掘調査概報—



1998

河内町教育委員会

## 序 文

大志白遺跡群の発掘調査は、平成4年2月に日本国土開発株式会社からアンビックス緑が丘ニュータウン開発事業計画書が提出されたことに起因し、試掘調査を経て平成8年10月から本調査が開始されました。

このたびの発掘調査は、河内町がいままで経験したことがない大規模な調査であり、実施に至るまでにたくさんの方々のご指導・ご助言等をいただいております。

栃木県のほぼ中央に位置する河内町の西部丘陵地帯には、いくつかの遺跡の包蔵地が確認されていますが、数百年前までしかわかっていない河内町の歴史が、この発掘調査によって数千年、数万年前の祖先の生活や他の地域とのつながりが明らかになるのではないかと大きな期待と関心を寄せています。

最後に、この発掘調査の目的をよくご理解賜わり、ご援助下さった日本国土開発株式会社関係者の方々に衷心より感謝の意を表すると同時に、ご指導をいただいた文化庁、栃木県教育委員会をはじめ関係各位のご協力に対して厚くお礼を申し上げます。

平成10年3月

河内町宅地造成事業遺跡調査団

団長 五月女 勝正

### 例 言

1. 本書は、アンビックス緑が丘ニュータウン開発事業に伴う平成9年度発掘調査の概要報告である。
2. 本調査区は、栃木県河内郡河内町大字下田原に所在する。
3. 調査は、河内町教育委員会が日本国土開発株式会社の委託を受け、河内町宅地造成事業遺跡調査団が実施した。
4. 本書の内容は、平成9年1月16日から平成9年12月26日までの調査成果にもとづいている。
5. 本書の編集・執筆は、河内町宅地造成事業遺跡調査団が行なった。
6. 発掘調査及び本書の作成にあたって、下記の方々や諸機関よりご指導・ご協力を頂いた。記して謝意を表したい。  
穴澤義功、海老原郁雄、亀田幸久、木下実、鈴木毅彦、中村紀男、早田勉  
文化庁、栃木県教育委員会、財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター、國學院大學栃木短期大學、リメックス株式会社、古環境研究所、日本国土開発株式会社

### 目 次

序文 / 例言 / 目次 .....	1
調査に至る経緯 / 位置図 .....	2
旧石器時代 .....	3、4
縄文時代 .....	5、6
古代 .....	7、8
中・近世 .....	9、10
総括 .....	11
組織 .....	12

〈表紙・裏表紙写真説明〉 表紙：縄文中期の住居跡 裏表紙：局部磨製石斧



## 調査に至る経緯

河内町の北西部には宇都宮丘陵と呼ばれる丘陵地帯がほぼ南北に連なる。とくに下田原地内には、大志白遺跡や姥ヶ入A遺跡などの周知の遺跡がこの丘陵の一角に所在する。

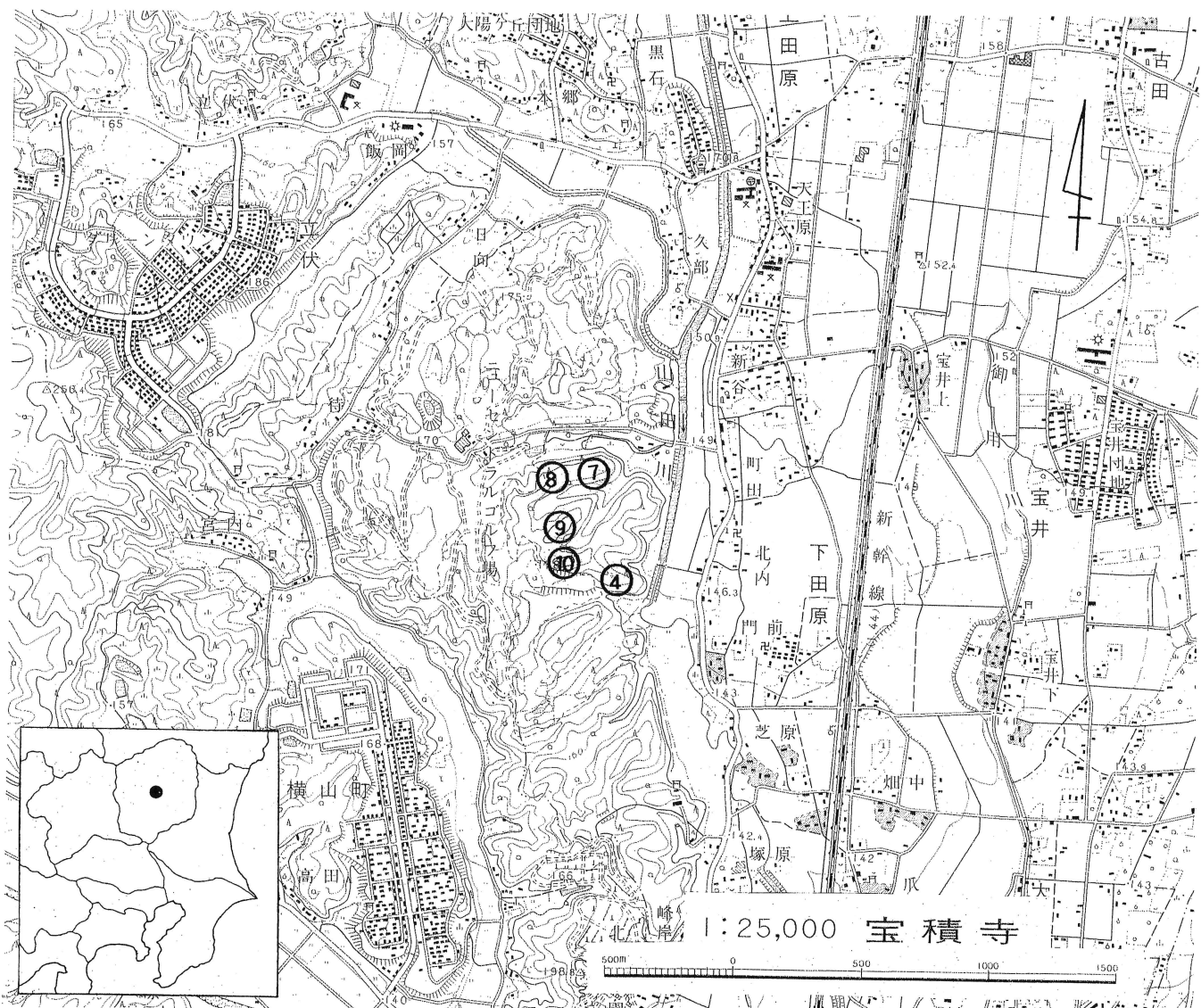
平成4年2月、これらの遺跡を含む丘陵一帯に日本国土開発株式会社によるアンビックス緑が丘ニュータウン開発計画が予定され、土地利用に関する事前協議書が河内町経由で栃木県に提出された。これを踏まえて町教育委員会では、同年12月に開発予定地内の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、開発予定地内（東ゾーン）には周知の遺跡を含む8か所の遺跡が存在することが明らかになった。

平成5年1月、県教育委員会より開発予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて、事前協議が必要であるとの通

知があった。平成6年5月になって、日本国土開発株式会社より変更事業計画書が提出され、同年7月には県教育委員会より再度開発予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて事前協議が必要であるとの通知があった。9月には県教育委員会より、開発に先立ち周知の遺跡等の発掘調査を行うという合意のもとに最終調整を終了した旨の通知があった。これを受けて町教育委員会では、平成7年4月から日本国土開発株式会社と発掘調査に関する具体的な協議を開始し、同年7月に町教育委員会の内部に、河内町宅地造成事業遺跡調査団を設置した。

平成8年3月～5月に周知の遺跡等の試掘調査を行い、開発予定地内に遺跡群の存在が明らかになったので、同年10月から大志白遺跡群の本調査を開始した。

(河内町教育委員会)



## 旧石器時代

### <第4地区>

第4地区は、東西に伸びる丘陵の先端から中央に位置し、沖積低地面よりの比高差は約13m～29mである。

本地区では試掘調査時に彫刻刀（グレイバー）が検出されている。

本調査においては、丘陵が尾根状の細長い地形のため先端部と中央部に調査区を設定し掘削した。

先端部の調査区では、鹿沼軽石層（X層）より上位の暗色帯（Ⅷ層）から、2か所の旧石器ブロックが検出された。これらは、流紋岩の石核・剥片を主体としているブロックと粘板岩の石核・剥片のブロックである。

中央部の調査区においては、先端部の調査区と同じ暗色帯から流紋岩の石核が出土している。



写真1 彫刻刀

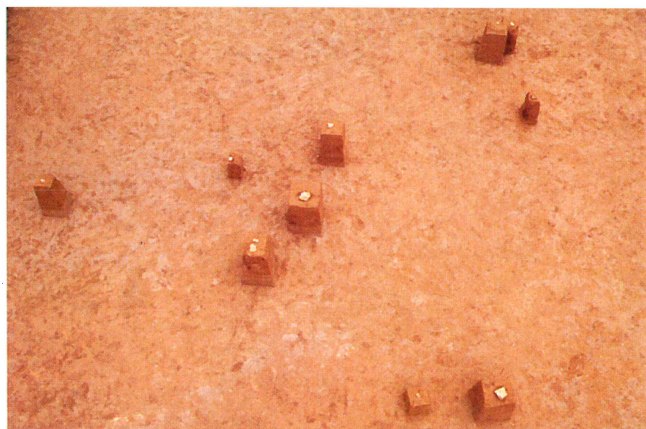


写真2 第4地区石器出土状況

### <第7地区>

第7地区は、東西に伸びる丘陵の先端から中央寄りに位置し、沖積低地面よりの比高差は約27m～30mである。

本地区では試掘調査時に旧石器の確認を行なったが、石器の発見には至らなかった。しかし、旧石器遺跡の存在が予想されることから本調査で旧石器調査を行なっ

た。

本調査においては、旧石器調査区を丘陵先端部と中央部寄りの2か所に設定し調査を行なった。

先端部の調査区においては、ローム層の堆積が厚く好条件であったが旧石器の発見には至らなかった。

中央部寄りの調査区においては、灰黄色スコリア（小川スコリア-Nt-Og）層より上位のロームから錐（ドリル）が1点出土している。さらに小川スコリア（Ⅵ層）から鹿沼軽石層までを掘削したところ暗色帯から多量の石器（石核・剥片など）が出土し、数か所のブロックが検出された。これらは、粘板岩と安山岩を主体とするブロックで、小さな谷頭を取り囲むように出土している。

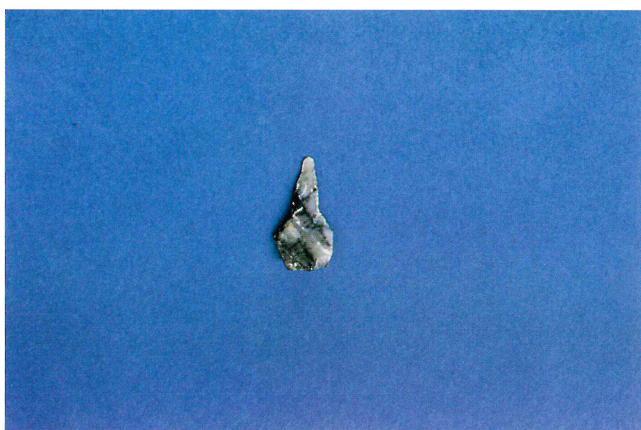


写真3 錐



写真4 第7地区石器出土状況

### <第8地区>

第8地区は、第7地区から続く丘陵の中央部に位置し、沖積低地面よりの比高差は約34mである。

本地区では試掘調査時に旧石器の確認調査は行なわれていないが、本調査において旧石器調査を行なった。

本調査においては、ローム層が第7地区よりも比較的薄く堆積していたが、鹿沼軽石層上位の暗色帯の上面と思われる深度から局部磨製石斧が検出された。この石器の出土層位は、AT（始良丹沢火山灰）降灰以前のローム層中にあると思われる。





写真5 局部磨製石斧

<第10地区>

第10地区は、第4地区から続く丘陵の最高位に位置し沖積低地面よりの比高差は約34m~49mである。

本地区では試掘調査時に安山岩の剥片が検出されている。

本調査においては、本地区に高低差があるため高位の平坦面と低位の緩斜面との2か所に旧石器調査区を設定

した。高位の設定区では鹿沼軽石層より上位の暗色帯から石刃（ブレイド）が検出され、さらに石核・剥片・礫器等を主体とする旧石器ブロックが検出された。石刃は単独で出土している。低位の設定区ではローム層の堆積は厚いが谷地形のため小川スコリア層より上位のローム層から黒曜石の石器が1点出土しているだけである。

(戸田 富二夫)



写真7 石刃

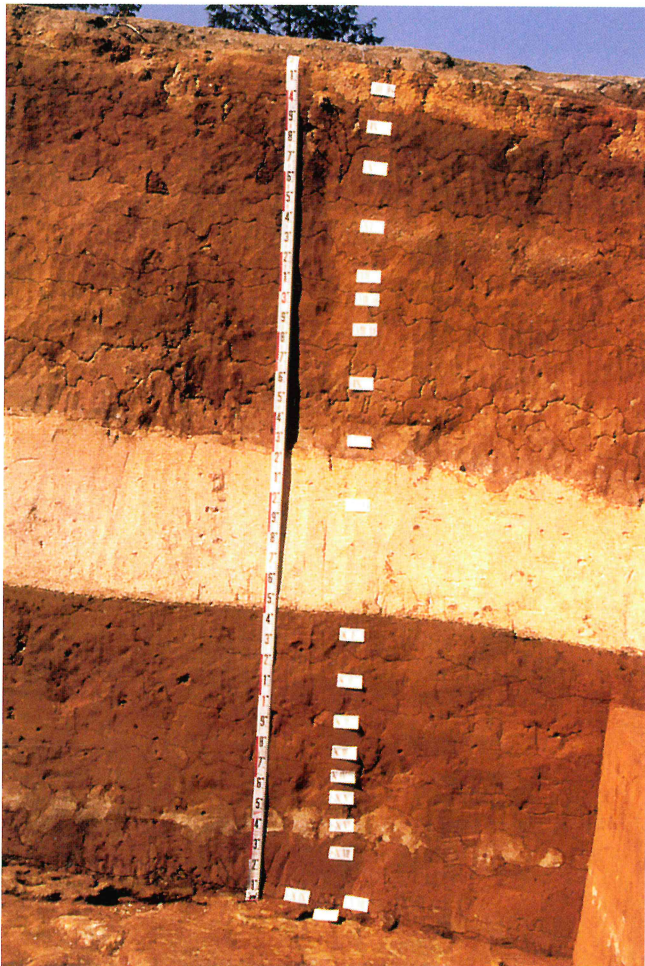


写真6 土層断面

土層堆積状況	旧石器出土地区
Ⅲa層 七本桜軽石	
Ⅲb層 今市軽石	
Ⅳ層	
Ⅴ層	4・7・10地区
Ⅵ層 小川スコリア	
Ⅶ層	
Ⅷa層 暗色帯	
Ⅷb層 //	4・7・8・10地区
Ⅸ層	
Xa層	
Xb層 鹿沼軽石	
X I層 暗色帯	
X II a層	
X II b層 八崎軽石	
X III層	
X IV層 行川第2軽石	
X V層	
X VI層 水沼第1軽石	
X VII層	
X VIII層 水沼第2軽石	
X IX層	
X X層 基盤岩	



## 縄文時代

縄文時代の遺構と遺物は、第4・7・8・10地区において、確認されている。

第4地区の遺構は、前期の住居跡3軒、前期の土坑3基、中期前葉の住居跡1軒、中期の袋状土坑10数基などである。その他に、早期頃に属すると推定される陥し穴状の土坑や、早期の土器を伴う土坑、多量の円礫が詰め込まれた円形土坑等が検出された。

前期の住居跡のうち1軒は、調査区南東の緩斜面に構築されており、東西方向の長軸が約9.2m、南北方向の短軸が約4.2mである。覆土中からは、多量の土器片と磨石や石皿等の石器が出土しており、住居中央には長さ約60cmで基部の破損した石棒状の大きな石があった。

住居の床面には、支柱穴6本と多くの小ピットが検出されたが、炉跡はなかった。この住居跡は、その規模や遺物の出土状況から見て、いわゆる前期の大型住居跡の範疇に入るものと思われる。

なお、この大型住居跡の北西部に隣接して、大型の不整形土坑と思われる遺構が検出されている。この遺構は、比較的浅い掘り込みで、覆土中から前期の土器破片など

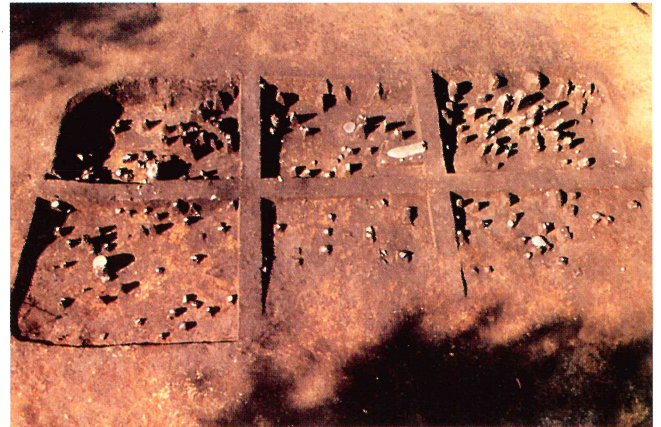


写真10 縄文前期の大型住居跡

が多量に出土しており、大型住居跡出土遺物との比較検討が課題となろう。

中期の住居跡は、平面形が不整円形を呈し、覆土中及び床面から大木系と思われる深鉢や石器等が出土した。

また袋状土坑からは、阿玉台式土器なども出土しており、そのほとんどが縄文中期に属するものと思われる。

袋状土坑の遺物出土状況は、底面全体に多量の焼土が



写真8 縄文中期の土器



写真11 袋状土坑



写真9 縄文中期の住居跡

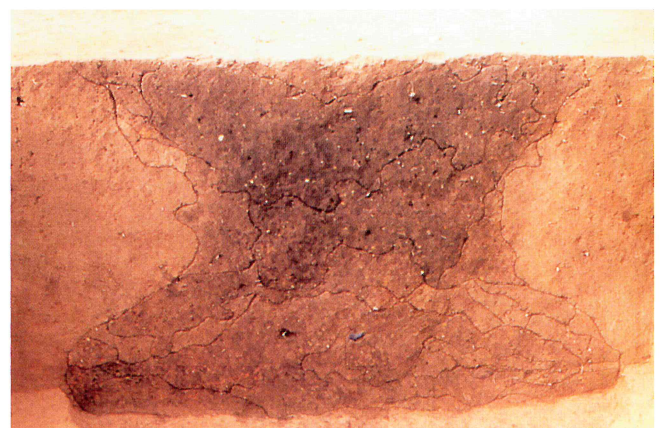


写真12 袋状土坑の断面





写真13 第4地区調査風景



写真14 集石土坑

広がり土器破片を伴うものや、破損した石棒状の石と土器を出土した例、中小の土器片と磨石や石器等を出土した例などがあつた。

この他、第4地区の表土層からは、早期では無文系土器や条痕文系土器や尖底土器底部などが出土した。また、前期の諸磯式土器破片、中期初頭及び加曾利E式期と思われる破片などがごく少量ではあるが出土している。

第7地区では、試掘調査時に多数の土器や石器類が表



写真15 第7地区袋状土坑の遺物出土状況

土層から検出されている。本調査においては、袋状土坑や焼土跡等が検出された。

袋状土坑は、旧石器調査時のローム層内で確認され、これを調査したところ、底面から多くの土器片や石器等が出土した。この土坑は、鹿沼軽石層の上面まで掘り込まれていた。



写真16 第7地区縄文土器出土状況

また、調査区西部の平坦面からは、楕円形の浅い土坑が検出され、中期の土器が数個体まとまって出土した。

第8地区では、試掘調査時に縄文土器が表土層から僅かに検出されていた。本調査においては、遺構は検出されず、縄文土器が少量出土したのみである。

第10地区は丘陵の頂上部に位置し、試掘調査時に土器が僅かに出土していた。本調査においては、縄文時代の遺構と断定できるものは検出されなかった。

なお、各地区からは、いわゆる陥穴の類が複数検出されているが、遺構の時代を判別することは難しい。

(戸田富二夫・上野川 勝)



## 古 代

古代の遺構は、各地区の丘陵上や丘陵斜面から、住居跡が検出されている。第4地区の住居跡は、山田川に近い丘陵東部と、斜面中位に各1軒ずつ構築されていた。1号住居跡は、斜面に構築されており、東西4.8m、南北3.3mで、南西隅部に四角い張り出し部がある。その特徴は、北壁と西壁と南壁に拡張または建替えと推定される痕跡が認められることである。カマドは、東壁に構築されていた。住居の年代は、出土した土器の年代観から、9世紀末から10世紀代である。

2号住居跡は、台地東部のやや平坦な場所にあり、床面からは、土師器（坏・甕）・須恵器（蓋）・木炭などが出土した。住居の壁面にも、焼土や木炭が見られた。住居の年代は、出土した土器から見て、8世紀後半から9世紀初頭頃と思われる。この住居跡は、森林保護区域にかかるため完掘することはできなかった。

第4地区の1号住居跡は、大志白遺跡群発掘調査概報Iで報告された第3地区古代水場遺構（池跡）と井戸跡に近接している。古代水場遺構（池跡）は、低地に接する丘陵下端を四角く掘り凹め、その一辺に木組みと石を



写真17 第4地区近景（東から）



写真18 第4地区1号住居跡調査風景（東から）



写真19 第4地区1号住居跡調査風景（南東から）

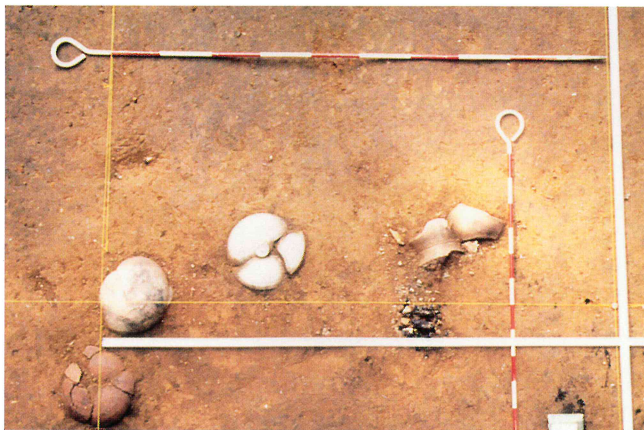


写真20 第4地区2号住居跡床面出土土器（上から）



写真21 第7地区調査風景（西から）



写真22 第7地区1号住居跡（南から）



使い堤を築いたものである。水場遺構（池跡）の上位には、2基の井戸と井戸から池跡に続く溝があり、この場所が長く水場として機能していた可能性が看取される。なお、水場遺構（池跡）からは、灰釉陶器破片・土師器などが出土しており、これらは第4地区1号住居跡の土器群と近接する時期の遺物である。

次に、第7地区の古代住居について報告する。第7地区では、標高175m前後の丘陵平坦面から合計3軒の住居跡が検出された。1号・2号住居跡は、丘陵上面の南東部に構築されていた。1号住居跡は、東西4.7m、南北3.3mで、カマドは北壁東寄りにあった。遺物は、土師器（坏）・須恵器（坏）などが出土した。遺物の時代は、8世紀末から9世紀初頭頃である。

2号住居跡は、東西2.3m、南北1.9mであった。住居の遺存状況は悪く、堅牢な床面と壁面の下端部が検出された程度である。遺物は、床面から須恵器（坏）破片が出土した。カマドについては、不明である。

3号住居跡は、第7地区西端の平坦部から検出された。住居の規模は、東西4.0m、南北2.9mである。カマドは、北壁中央に構築されており、袖部や天井部には砂岩や花崗岩が使用されている。この住居の年代は、出土した土

器から、1号住居跡とほぼ同じ頃と思われる。

次に、第10地区の古代住居跡について、概観する。第10地区は丘陵地の西部に位置し、標高は約190m前後で、沖積地からの比高は約45mである。住居跡は、丘陵頂部の平坦面に1軒だけ確認された。その規模は、東西2.0m、南北2.3mである。カマドは北壁中央に構築されており、袖や天井部には砂岩や凝灰岩などが使用されていた。住居跡北側の表土層からは、須恵器（坏）が1点出土している。

このように、大志白遺跡群では、丘陵の南斜面中位や丘陵上の平坦面から緩斜面にかけての場所から、古代の住居跡が発掘されている。住居跡の年代は、奈良時代後半から平安時代のものである。この丘陵では、8世紀後半から9世紀初頭頃にかけての時期と、9世紀末頃から10世紀代にかけての時期に、古代の人々が生活を営んでいたことが判明し、丘陵地での古代遺構の分布状況が解明された。今回の調査では、こうした場所でどのような居住形態と生産活動が展開されたのかという課題が浮かび上がってきたと言えよう。（上野川 勝）

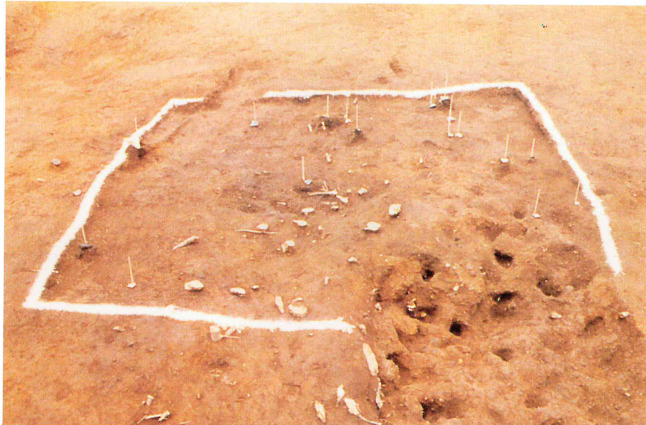


写真23 第7地区2号住居跡（南から）



写真24 第7地区3号住居跡（南から）



写真25 第7地区3号住居跡カマド（南東から）



写真26 第10地区1号住居跡（南西から）



## 中・近世

大志白遺跡群では、中・近世の遺構として、塚群が発見されている。塚は、合計19基であった。

第4地区では、丘陵東端に3号塚が単独で築造されている。その規模は、東西・南北約7m、高さ約1m。平面形は四角形に近い。この塚は森林保護区域にあり、保存されることになっている。

また、第4地区では丘陵南側斜面中位の小径に添って、4号塚から10号塚の7基が東西に並んで造営されており、いわゆる七塚の類と考えられる。4号塚と5号塚は、直径3.5m程度の円形を呈し、ほぼ南北に隣接する。5号塚の北側基底部からは、寛永通宝1枚と砥石1点が出土した。6号塚から8号塚の3基は、直径3～4mで、その平面形は円形である。その盛土は、ローム質土を若干突き固めている。

8号塚では、東側の斜面を斜めに掘り込んで基底面を造り、その上に盛土を行なっていることが判明した。9号塚においても、自然層である遺跡基本土層Ⅱa層を意識的に掘り込んで整地し、その上に盛土を行っている。9号塚と10号塚は、8号塚の西側約15mの場所に2基並んで築造されていた。その直径は2.6～2.8mで、その平



写真27 第4地区七塚調査風景（北東から）



写真28 第4地区6号塚・7号塚・8号塚調査状況（東から）



写真29 第4地区5号塚調査風景（南から）



写真30 第4地区8号塚土層断面（東から）



写真31 第6地区15号塚土層断面（南から）



写真32 第7地区17号塚調査前状況（南東から）



面形は円形である。

第6地区では、丘陵東端の平坦面に、平面形が四角形に近い塚が、単独で造られていた。その盛土は、非常に堅いローム質土であり、意識的に強く突き固められている。この15号塚と同じ特徴を持つ塚として、第9地区の16号塚がある。これは、標高約200mの山頂に単独で造られており、東西4.5m、南北5.0m、高さ約0.5m。この場所からは、日光連山・鶏頂山方面と丘陵下の集落を一望することができる。

第7地区では、丘陵南東斜面に3基の塚が東西に並んで造営されている。17号塚では、盛土内からかわらけ1点が出土し、裾部には直径約35cmの焼土が見られた。塚の基底面には、溝が円形に掘られているが、中央の掘り残し部分は四角を意識しているようでもある。17号塚の規模は、東西5.25m、南北4.65m、高さ約0.6m。17号塚の西側に位置する18号塚は、東西4.7m、南北4.3m、高さ約0.55m。塚基底面には四角い溝が掘られており、溝の南東部には直径90cmの木炭集中部があった。19号塚は、東西3.55m、南北3.75m、高さ約0.40m。この塚にも基底面に四角形に近い溝が掘られている。

第10地区では、13号塚・14号塚の2基が確認された。その規模は、直径2.5~2.7m、高さ約50cm。盛土はやわらかく、遺物は出土しなかった。(上野川 勝)



写真33 第7地区17号塚盛土内かわらけ出土状況(南から)



写真34 第7地区17号塚土層・周溝状況(南東から)

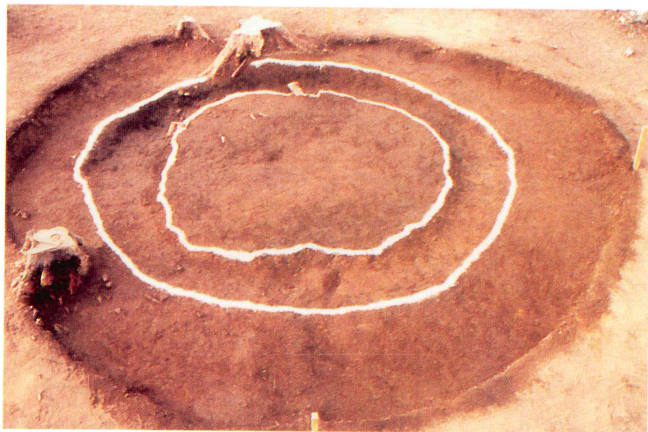


写真35 第7地区17号塚完掘状況(南から)



写真36 第7地区18号塚調査前状況(南から)



写真37 第7地区18号塚土層・周溝状況(南から)



写真38 第7地区18号塚完掘状況(南から)



# 総 括

大志白遺跡群は栃木県河内郡河内町下田原地内に所在する。宇都宮丘陵の北部に位置し、山田川の右岸で標高146~200mの丘陵上に立地する。

平成8年3月11日~5月2日まで周知の遺跡等の試掘調査が行なわれたが、その結果丘陵頂部の平坦面や尾根上の緩斜面に、旧石器時代から縄文時代早・前・中期、古代~近世にわたる複合遺跡の存在が確認された。よってこれらの遺跡を大志白遺跡群と総称する。

遺跡の乗る宇都宮丘陵は栃木県でも古い地形面のひとつに属し、この丘陵には更新世の火山灰が厚く堆積している。大志白遺跡群では、基盤岩の凝灰質砂層のうえに赤城火山起源の水沼第2軽石以上のテフラがみられる。

丘陵は古鬼怒川の開析谷が支谷を形成し、樹枝状の尾根が東南方向に緩やかに連なる。このような尾根の最高位の平坦面や中間点、先端部に旧石器時代の遺跡や縄文時代の遺跡が検出されている。

大志白遺跡群は45haという広大な調査対象地域のなかに点在する。この遺跡調査は民間開発事業に伴う事前調査であり、記録保存を目的とした調査であるが、私たちは丘陵上に占地する遺跡の種類、時代、遺構・遺物の遺存状態と性格、土層の堆積状況などを明らかにし、宇都宮丘陵北部における遺跡群の実態解明を目的とした調査を指向している。

今回の報告は主に平成9年度に実施された第4・7・8・9・10地区の概要をまとめたものである。調査面積は遺構調査が約10700m<sup>2</sup>、旧石器調査が約1900m<sup>2</sup>である。各地区は尾根の最高位の平坦面や中間点の平坦面、先端部の緩斜面に位置する。

今回の調査の概要は時代別に詳細に述べられているので省略するが、いくつかの成果をまとめておきたい。

①旧石器時代の遺物は8・10地区では暗色帯（Ⅷ層）中に単独で発見された。しかし7地区では、尾根の中間点に形成された鞍部に近い緩斜面で、暗色帯中から数ヶ所のブロックが埋没谷を取り囲むように検出された。

4地区では尾根の中間点にあたる尾根筋の平坦面で、暗色帯中に単独のブロックが検出された。また先端部の平坦面から緩斜面に移行する変換点で、暗色帯中に2ヶ所のブロックが検出されている。

②縄文時代のまとまった遺構が4地区で検出された。中央の広場を取り囲むように袋状土坑が群在し、さらに袋状土坑の外側に住居跡が検出された。特に調査区の南斜面には縄文前期の大型住居が構築されていた。

③古代の住居跡が4・7・10地区から検出された。これらの住居跡は尾根の平坦面や南向きの緩斜面に作られていた。

この丘陵では8世紀末~9世紀初頭、9世紀末~10世紀代にかけての時期に人々の生活が営まれた。

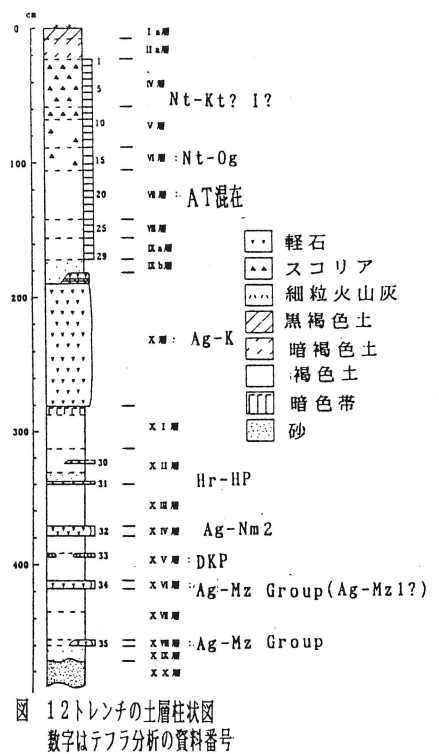
なお、大志白遺跡群では試掘調査時にテフラ（図）と植物珪酸体分析を古環境研究所の早田勉氏に依頼したので、その概要を述べておきたい。この丘陵では下位より赤城水沼テフラ群、

大山倉吉軽石、赤城行川2テフラ、榛名八崎テフラ、赤城鹿沼テフラ、始良Tn火山灰、男体小川スコリアが検出されている。早田氏によれば、本県では那須町七曲遺跡でAg-Nm2の下位から石器が出土しているのので、この層準から石器が検出される可能性があるという。大志白遺跡群では平成10年3月に行なわれた旧石器調査で、5地区の水沼第1軽石の直下から安山岩製の礫石器が1点検出されたので、この丘陵にも5万年以上まえに人類が訪れたことが明らかとなった。なお5地区の層位については、東京都立大学の鈴木毅彦氏の教示をえた。

植物珪酸体分析では、本遺跡群の古植生・古環境が明らかにされた。その結果、赤城鹿沼テフラ以前の時期はクマザサ属を主体としたイネ科の植生が続いていたらしいが、榛名八崎軽石より上位のXII層ではネザサ節が多い。ネザサ節は赤城水沼テフラ群より下位でもみられ、この時期は寒冷気候であったが、XII層~IX層の時期は温暖な気候であったらしい。

赤城鹿沼テフラ直上のXa層から男体今市スコリア下位のV層にかけてはクマザサ属を主体とするイネ科植生が続き、始良Tn火山灰直上のVII層ではクマザサ属が繁茂し、最終氷期の寒冷期に対応するものと考えられている。

大志白遺跡群では、旧石器時代から縄文時代、さらに古代の様相が徐々に明らかにされつつある。（戸田正勝）





## 河内町宅地造成事業遺跡調査団組織名簿

団 長	五月女勝正	河内町教育委員会教育長
参 与	南木 昭男	河内町企画課課長
	増渕 昭	河内町都市計画課課長
	五月女正典	河内町産業経済課課長
	湯浅 教郎	河内町農業委員会事務局長
	田中 伸明	河内町教育委員会事務局社会教育課課長
総括主任	戸田 正勝	國學院大學栃木短期大學学芸員・講師
調 査 員	上野川 勝	日本考古学協会会員
	戸田富二夫	東 洋 大 学 卒
	茂木 孝行	栃木県文化財保護指導委員
庶 務	河内町教育委員会事務局社会教育課	
	斎藤 清美	社会教育課課長補佐
	斎藤 幸夫	社会教育課副主幹兼文化振興係長
	石井 良枝	社会教育課文化振興係

(平成10年3月末現在)

事業主 日本国土開発株式会社  
 協力会社 リメックス株式会社  
 所 長 須田 修 副所長 石川恭行 監督 干川英雄  
 技 師 鈴木憲夫 前田卓宏 辻弘和 西田知孝 事務 伊藤トヨ子 賄い 猪瀬ヒサ子  
 測 量 宇賀神誠 亀田弘 柏崎広伸 五味渕正美 飯塚広美 磯村真理 山形浩子  
 作 業 員 班長 青木兵造  
 斎藤昭男 鈴木久夫 住谷昭 田中勇三 田中正男 滝口菊雄 戸村義男 蛭川弘  
 半田実 長谷川健二 藤江庄平 増渕宏之 村田庄一郎 森田元三 山田昭八郎  
 和田崇 藍原千代子 磯村秀子 和泉敦子 岡本里子 菊池美代子 小林久子  
 斎藤サイ 酒井勝子 鈴木夢子 田中ミヤ 田村敏江 綱川マツノ 富田宏子  
 福田弘美 水野三枝子 宮田マツエ 森田昌子 矢口ケイ子 渡辺道代  
 須藤久之進 相馬隆 相馬一成  
 重 機 (株)小宅建材 金沢重美 君島光司







---

大志白遺跡群発掘調査概報 II

1998年3月31日

編集 河内町宅地造成事業遺跡調査団  
発行 河内町教育委員会

☎329-1105

栃木県河内郡河内町中岡本 3 2 2 5

TEL028 (673) 0800

印刷 (株)松井ピ・テ・オ・印刷

---

子都宮市教育委員会